

〈当日! 新作映画上映も!〉

土本典昭・小沢昭一のコンビが
日常生活の隅から問いかける衝撃のシネエッセイ!

原発切抜帖

記録映画16ミリカラー・45分 1982年青林舎作品

11年間
で69年

毎日家々に配達される新聞……その一面から三面まで埋め尽くす有相無相の記事の群は、私たちが生きてきた時代時代、いえ日々の風速計のようなものに思えます。この十年、洪水のような情報の中を三ひとつひとつの出来事を切り抜いてきたのは、私には何かへの証文をとることでした。

私が原発に注意し、切り抜きに「船むつ」が何かと世間を騒が

立研究など名のつくもの、原爆はにどうも馴染めないもの

今回、わが切り抜き帖ンパツをいま一度見つ

屈者の繰り言に、ど

疑り始めたのは、確か「原子力」
せ始めた頃でした。およそ原子
もちろん、原子力発電という代物
があったのです。

と思い出の彼方の記事を辿って、ゲ
め直したい思いに駆られました。偏
うかお付き合い願いたい次第です。

製作 山上徹二郎、米田正篤

企画・演出 土本典昭

撮影 渡辺重治

監修 高木仁三郎、西尾漢

語り 小沢昭一

音楽 高橋悠治と水牛楽団

作者よりあらすじにかえて

土本典昭

この映画製作の動機に、ある若いアジア人のひとことがありました。「私の国で原発をつくる日がきたら、きっと日本がひきあいに出されるでしょう。“原爆の怖ろしさをあれほど知っている日本でさえ、原発大岡になっているではないか”と。

昭和20年8月7日、広島のパカの第一報は3.5センチ角のベタ記事でした。「焼夷弾により若干の被害が出た模様」と国民の眼に原爆であることを隠したまま終戦に至りました。以後7年の占領期間、原爆被害報道はタブーであり、日映の原爆フィルムは没収されたのです。

昭和29年の第五福竜丸の死の灰による被爆は大事件でした。今回映画で当時の連日のニュースを追ってみると、福竜丸は広大な危険区域(立入禁止)の60キロ圏外の洋上で被災したことに気づきました。

アメリカ軍部の原子力・放射能障害の危険性の認識ぐあいはせいぜいその程度だったのではないかとすれば、それをベースに計算された原子力の安全性、放射能の安全基準は、その出発から誤算したままではないかとの疑いが生じました。

この映画は内外の原子力事故の追跡を当時の新聞報道の一行一行で試みたものです。

そして何より自ら怖ろしくなったのは、アメリカの米兵にせよ、南太平洋の島民にせよ20年、30年のちに病み死んでいっている、その“時差”でした。

ヒロシマ・ナガサキの体験をいつ、なぜ見失ったか、それは一篇のミステリーとも思えるのでした……。

歩み出しの原点として

高木仁三郎

情報の洪水の中に置かれた私たちは、次々と新しい情報を追い求めることが習性になっている。だが、情報の海の前に、私たちは曇りなく状況を見据えるみずみずしい感性をすり減らしていないか。

原子力と核をめぐる夥しい情報は、戦後の世界の特徴である。そこでは、大事故の情報にすら私たちは餓い馴らされ、憤りを忘れ、被害者たちの苦しみを受けとめる感性を失っている。土本さんの映像が、小沢さんの語りと相まって私たちに問うのは、そんな私たちの現在、私たちが原発や核と向き合う姿勢そのものである。恐しいまでに私たちの心につきささるこの映画が、全国をかけめぐり、明日への歩み出しの力となることを、大きく期待したい。

媒体を使った媒体のユニークさ

宇佐美 承

媒体が媒体を使って真実に迫ろうというのだから驚いた。この映画の原発反対論に対する反対・賛成の立場をこえて、媒体にされた媒体、つまり新聞は、自分の体質について考えこむことだろう。

記者の善意と努力をこの映画は追っている。記者はそれぞれの時代に、原爆の脅威を訴え、原子力平和利用の夢を語い、放射線洩れを告発した。そしていま、人類の進歩と滅亡のはざまにあって苦悩している。一つ一つの記事は善意でありながら、通してみれば矛盾にみちている。つまり新聞は哲学者ではないのだ。そこをこの映画はあきらかにしつつ、原子力の危険について、人びとの目をひらかせていく。その着想とテクニックは、心にくいほどである。

小沢昭一氏は進んで語りをひきうけた。氏の畢生の事業、シャボン玉座の全国旗上げ公演のあいまをめぐって、報酬を拒んで協力された。氏は「わた史発掘」「言わぬが花一小沢昭一的世界」などで、資料を駆使した著作を発表、消えゆく芸能の記録など、記録者としての数々の労作をのこしている。

製作	山上徹二郎 米田正篤	はりうたかし 藤本幸久
企画演出	土本典昭	
監修	高木仁三郎 西尾漢	取材協力 東京大学新聞研究所
語り	小沢昭一	協力 香内三郎
音楽	高橋悠治と水牛楽団	高岩 仁 武川五平 平川千宏 前田勝弘 山内登貴夫 岩波映画製作所 風の会 プルトニウム研究会
撮影	渡辺重治	
撮影助手	清水良雄 平坂政一	
録音	久保田幸雄	
ネガ編集	加納宗子	
タイトル	坂口 康	
台詞	長瀬未代子	製作本部 高木隆太郎 金子和恵 清田秀子
資料構成	井上敦子 神原 聡 北村小貴子 土本亜理子 二宮敬嗣 能勢 剛	



